



Title	友人関係が中学生の精神的健康に及ぼす影響に関する研究/中学校生活に不適応を示す生徒の発言内容から作成した友人関係質問紙の検討/中学生の精神的健康度に影響を及ぼす仲間友人関係の特徴
Author(s)	熊谷, 有紀子
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56162
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

友人関係が中学生の精神的健康に及ぼす影響に関する研究

- ・ 中学校生活に不適応を示す生徒の発言内容から作成した友人関係質問紙の検討
- ・ 中学生の精神的健康度に影響を及ぼす仲間友人関係の特徴

大阪大学大学院

大阪大学・金沢大学・浜松医科大学

連合小児発達学研究科

小児発達学専攻

熊谷有紀子

2016年3月 博士学位論文

中学校生活に不適応を示す生徒の発言内容から作成した友人関係質問紙の検討

熊谷有紀子¹⁾, 棟居俊夫²⁾, 大井 学³⁾

1) 金沢市教育プラザ研修相談センター

2) 金沢大学子どものこころの発達研究センター

3) 金沢大学人間社会研究域学校教育系

Developing a questionnaire to examine the characteristics of peer relationships from the perspective of complaints expressed by maladjusted Japanese junior high school students

Yukiko KUMAGAI, Toshio MUNESUE, Manabu OI

1) Kanazawa Education Plaza Studies and Consultation Center

2) Research Center for Child Mental Development, Kanazawa University

3) College of Human and Teacher Education, Kanazawa University

Abstract

We developed a questionnaire with 19 questions on peer relationships in junior high school. These questions were created to depict the characteristic peer relationships of students who have failed to adjust to school life. Through repeated factor analyses, we found that the questionnaire consisted of four factors. We ascertained that the internal consistency reliability was almost acceptable (Cronbach's α , 0.669 to 0.774). The questionnaire results were significantly correlated with those from another measure assessing peer friendship in junior high school students, suggesting that criterion-related validity was established. The four factors obtained in the current study were very different from those found in other published studies. As the questionnaire may be useful for psychological assessments of students who struggle to adjust to school life, investigating this questionnaire's test-retest reliability and construct validity is necessary.

Key words friendship, junior high school, questionnaire, school maladjustment

序

中学生時代は青年期の初めにあたる。青年期は学童期から成人期への移行の時期だが、移行といっても10歳代初めから30歳前後ま

での約20年間の長きに及び(笠原, 1977), 中学校生活から, その後の進学, 就職, あるいはさらに別の生き方までが, めまぐるしく続く重要な時期である。この長い時間の中で,

若者たちはいずれ社会の中で自立した生活を送るための成長をとげなければならない。

この青年期の初期にあたる中学生時代の特徴は、個人差が大きいとは言え、第一に第二次性徴に代表される身体の急激な変化が起こること、第二に物事の形式的あるいは抽象的な考え方ができはじめること、第三に反抗期に代表される、親子から友人同士への、他者との関係の変化が起こり始めることである（川原・山崎，1996）。このような変化を体験しながら、一方で中学生は1日の多くの時間を授業、部活動、習い事、家族との交流、趣味、そして友だちづきあいにて過ごす。同級生との交流の中で、彼らは親友を求め、人目を気にし、そして異性へのほのかな憧憬をもつ（村瀬，1986，a）。中学生の約9割は友人をもっていると回答（残りの約1割は不明）しており（厚生労働省，2015），お互いに友人同士で知り合うことが多いほど、学校適応が良いことが示唆されている（粕谷，2013）。しかし、中学時代はいわゆる「いじめ」の好発期でもある（村瀬，1986，b）。いじめが認知された学校の割合は、小学校で48.4%，中学校で65.5%，高等学校で44.4%であり、中学生において最も多い（文部科学省，2014）。また友人関係には好ましい機能と好ましくない機能の両面が存在することが示唆されている（高坂・池田・葉山・佐藤，2010a）。さらに学校への不適応の表れである不登校は小学生の0.36%とくらべて中学生において2.69%と高値である（文部科学省，2014）。中学生が不登校になったきっかけと推測される状況は、多い順に、無気力26.2%，不安などの情緒的混乱26.2%，いじめを除く友人関係をめぐる問題15.9%であり、友人関係の重要さが示唆されている（文部科学省，2014）。

中学生の友人関係の内実を捉えようとした研究は我が国においていくつかある。ほとんどが大集団を対象に質問紙への回答を求

める方法をとる。例えば、友人関係に及ぼす感情の問題に注目した研究（田中・下田，2013；小野・戸田，2002），友人関係における被注察感を取り上げた研究（高坂，2010b），友人関係のどの側面を重視するかという態度と抑うつとの関連を検討した研究（黒田・桜井，2001），友人関係と学校への適応感を調べた研究（粕谷，2013），友人との協調あるいは友人からの独立を検討した研究（中島・五十嵐，2012；奥野・小林，2007）である。しかし、大学生など他の年代向けに開発された質問紙を中学生に使用する研究，あるいは中学生と他の年代とを合わせて検討する研究も数多く，中学生向けに開発された質問紙を中学生に限定して実施した研究は少ない（田中他，2013；高坂，2010b；黒田他，2001；粕谷，2013；奥野他，2007）。仮に小学生，中学生，高校生，大学生と所属学校別の年代に分けても，各年代における友人関係の内実とは異なると思われる（榎本，2003）。従って，その年代向けに開発された質問紙を，その年代に施行することが必要である。

青年期は全体として精神疾患の好発期であり，中学生時代もその渦中にある。また生来性の，あるいは幼児期に発症する精神疾患や発達障がい（自閉スペクトラム症，注意欠如・多動症など）を有する生徒も中学校通常学級に在籍している。従来の研究において使用された，友人関係に関する全ての質問紙は，その開発にあたって，われわれが知りうる限り，精神疾患や発達障がいを有していない生徒を念頭に置いて作成されている。精神疾患や発達障がいを有している生徒の友人関係はそうでない友人関係と多少異なることが想定されるが，そのような観点から作成されている質問紙を見つけることはできなかった。本研究は，中学校生活へうまく適応できていない生徒の視点からの質問紙を作成し，普通学級に在籍する中学生に施行し，その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。

方法

1. 質問紙の作成

質問紙に含まれる設問は、石川県金沢市の教育委員会に属する相談施設を訪れる中学生生徒との日頃の会話から得られる、対人関係についての発話から、筆頭筆者が抽出した。この相談施設には学校生活にうまく適応できず、不登校、情緒不安定などの状態に陥っている生徒が数多く訪れる（年間実人数は約200人）。彼らの中には医療機関から診断を受けている者もいるが、医療機関には受診していない者もいる。また精神疾患の閾値に達していない者も含まれるだろう。しかし、彼らは広義の精神的な不調をきたしていると言うことができる。この相談施設における、1対1の相談活動の中で、生徒同士の集団活動の中で、あるいは自由な時間において、彼らはさまざまな悩み、希望、人生観を口にする。その中には、他の生徒との関係についての感想や意見が含まれる。これは、不適応のために施設を訪れ、定期的に通い続ける中で、打ち解けることができるようになった筆頭筆者が発した、対人交流に関する言葉である。この中から筆頭筆者（この施設に7年間在籍）が頻繁に聞いた感想や意見を想起し、順に文章として書き出した。筆頭筆者と最終筆者がその内容を勘案し、設問の追加と削除を繰り返しながら最終的に33の設問とした。系統的方法により収集された設問ではなく、彼らの対人関係を大人が観察することにより集められた設問ではなく、また理論的背景から導き出された設問でもない。彼らの日常における発言を集めた質問紙であり、このことが今回の質問紙の大きな特徴である。この質問紙を自己記入式として、「まったく思わない」、「あまり思わない」、「どちらかと言えば思わない」、「どちらかと言えば思う」、「よく思う」、「とてもよく思う」の6つから一つを選択させた。また、それぞれに1点から6点

までの得点を付した。

2. 同時に施行した質問紙

本質問紙の基準関連妥当性を検討するために、榎本が作成した質問紙（榎本，2003；以下、榎本質問紙）をも対象者に記入させた。榎本質問紙は、中学生から大学生までの友人関係を、友人との活動（全29設問）、友人への感情（全25設問）、友人への欲求（全15設問）という3つの側面から評価する。そして、友人との活動は「相互理解活動」、「親密確認行動」、「共有活動」、「閉鎖的活動」の4因子、友人への感情は「信頼・安定」、「不安・懸念」、「独立」、「ライバル意識」、「葛藤」の5因子、友人への欲求は「相互尊重欲求」、「親和欲求」、「同調欲求」の3因子から構成されている。また中学生、高校生、大学生に施行可能である。榎本質問紙は、中学生のこころの内面を検討する研究において、他の質問紙と合わせて施行されることがあり（笠原・島谷，2012；田中他，2013；中島他，2012），広く認知された質問紙であると考えられる。ただし信頼性や妥当性は十分に確立されていない。

3. 対象

石川県金沢市内の3つの中学に在籍する生徒を対象とした。市の教育委員会と相談し、市の中心部、郊外、学術振興地区から、校内事情の比較的落ち着いた中学校を1校ずつ選んだ（それぞれA校、B校、C校とする）。各校の事情のために、A校は全学年の全クラス（1年生5クラス、2年生5クラス、3年生5クラス）、B校は2年生の全5クラス、C校は3年生の1クラスに在籍する生徒全員が対象となった。

4. 質問紙の配布と回答

本質問紙および榎本質問紙の各生徒への配布は、授業時間中に行われた。各生徒は、

教室において担任教師から研究の説明を受け、回答を拒否できること、個人の秘密は守られることを知らされた上で、無記名で、学年と性別を記入し、質問紙に回答した。つまり連結不可能匿名化が行われている。質問紙はクラスごとに担任が回収し、その内容を見ることをせずに筆頭筆者に渡した。本研究では、対象者本人からの文書による同意や保護者からの同意が得られていないが、「疫学研究における倫理指針」（文部科学省・厚生労働省、平成 20 年 12 月 1 日一部改正）に基づいて行われ、研究計画は金沢大学医学倫理委員会の承認が得られている（1015 番、平成 23 年 10 月 26 日）。

5. 質問紙の回収と欠損値の処理

回収された質問紙の数は、A 校 558 人（1 年生 172 人、2 年生 206 人、3 年生 180 人：男子 291 人、女子 267 人）、B 校 178 人（男子 89 人、女子 89 人）、C 校 42 人（男子 22 人、女子 20 人）であり、全体で 778 人（1 年生 172 人、2 年生 384 人、3 年生 222 人：男子 402 人、女子 376 人）であった。回答しなかった者の人数は不明だが、配布クラス数とクラスに所属する人数を考えるとほぼ全員が回答したものと推測された。なお、回答に要した時間は 45 分までであった。

ここで各設問に 1 つでも欠損値のある場合は、その対象者の回答を解析から除いた。その結果、解析対象数は全体で 640 人（回収数の 82.3%）であった（Table 1）。回収数に対する解析数の割合は、70%（C 校女子）から 86.4%（A 校 2 年生男子）までであり、学校別、学年別、性別にほとんどが 80%を超えていた。また、全体として 1 年生 80.8%、2 年生 83.3%、3 年生 81.5%、男子 82.1%、女子 82.4%であり、解析対象者は回答対象者をほぼ代表していると考えた。

6. 統計処理

本研究における統計処理は、質問紙法の作成に関する定型的な方法に従った（小塩，2011）。まず各設問の得点分布を見て、天井効果や床効果の有無を検討する。次に初回の因子分析を主因子法により行い、スクリープロットと固有値から因子数を暫定的に決める。2 回目以降の因子分析は主因子法、因子間には相関関係があると予想し、プロマックス回転を採用して行う。その際に 0.35 の因子負荷量を基準に、選択する設問、削除する設問を検討する。同様の因子分析を繰り返しながら、最終的に、適切であろうと推定される因子数と各因子内の設問を定める。ここで各因子を適切に表す名を付ける。信頼性の検討は各因子の Cronbach's α を求めることにより行う。次に各因子の合計点を従属変数、学校、学年、性を独立変数とした分散分析を行い、各独立変数内の格差を検討する。最後に基準関連妥当性の検討として各因子と原本質問紙の各因子との相関係数を算出する。

結果

1. 設問ごとの回答の分布

本質問紙の回答は 6 件法であり、設問ごとに得点の分布を検討した。まず全ての設問において正規分布はしていなかった。次に、全ての設問において、平均+1 標準偏差の値は得点 6 を超えておらず、天井効果は見られないと考えた。一方、平均値-1 標準偏差が得点 1 を下回る設問が 4 つあり、床効果の存在がうかがわれた。つまり、設問 3「友人をもたなくてもいいというルールがあれば、本当は友だちなんていらなと思う」、設問 4「友だちとは、学校にいる時間だけつきあいたい」、設問 15「学校でも、できるならば一人の時間を過ごしたいと思う」、設問 33「自分の好きなことを話せる友だちがいない」である。しかし、これらの設問は対人関係がうまくいっていない、あるいは対人関係を重視していない生徒がよく口にする内容であり、床

効果があるものの今後の検討のために残した。

2. 設問および因子の抽出

1) 初回の因子分析

因子抽出法は主因子法を採用し、得られたスクリープロットから因子数を4因子と暫定的に定めた。なお、いずれの固有値も1を超えていた。

2) 2回目の因子分析

主因子法、プロマックス回転を採用し、因子数は4とした。まず負荷量が0.35以上である設問を残した。次に負荷量が0.30以上0.35未満である場合、1因子に限定されている5つの設問(8, 24, 1, 16, 25)を残した(設問の番号は本論文の付録にある質問表の各設問の番号に対応する)。その他の10の設問(11, 28, 14, 22, 32, 18, 23, 19, 30, 12)は今後の解析から除外した。従って、質問紙の23設問に対して以下の解析が行われた。

3) 3回目の因子分析

残した5つの設問のうち、設問16は0.35以上の負荷量となったが、設問8, 24, 1, 25はそうならなかった。そこで、設問16のみを残し、全体で19設問とした。

4) 4回目の因子分析

19設問の因子分析におけるスクリープロット(Figure 1)、因子分析結果(パターン行列)および因子相関行列(Table 2)を示す。ここで、第1因子(設問15, 4, 7, 27, 3, 33, 5)を「独立独歩」、第2因子(設問29, 17, 31, 6)を「社交上手」、第3因子(設問20, 21, 13, 6, 2)を「評価重視」、第4因子(設問26, 9, 10)を「愛他性」と名付けた。

5) 5回目および6回目の因子分析

これまでの経過の中で設問から除外したが、上記の4因子に該当しそうな設問8, 1, 11, 14, 23を入れて因子分析を再度行った。0.3以上の負荷量を示した設問8, 1を残し、さらに因子分析を行った。しかしいずれの設問の因子負荷量も0.35以上にはならなかった。また抽出後の負荷量平方和の累積%はこの2つの設問の追加前は42.1%であり、追加後は39.3%であったことより前述の19設問のままが最適であると考えた。

3. 信頼性の検討

まず設問17は負の負荷量を示していたので、逆転項目であるとして、その処理を行った。その後、各因子のCronbach's α を求めると、第1因子では0.752(設問5を除くと0.756に上昇)、第2因子では0.774、第3因子では0.669、第4因子では0.773(設問10を除くと0.784に上昇)であった。第1因子と第4因子において、それぞれ設問5、設問10を除くとCronbach's α は上昇したが、その割合はわずかであり、各因子の設問数が少なく、また現状の α 係数でも0.7を超えており不満な数字ではないので、今後の検討において設問を除く処理は行わなかった。第3因子において信頼性に疑問がやや残るものの、他の因子では受け入れられる値であった。今回の研究は予備的なものであり、さらなる信頼性の向上のための処理を行わないこととした。

4. 各因子の統計量

各因子の得点分布は正規性ではなかった。各因子の下位尺度平均得点は、「独立独歩」2.1、「社交上手」3.6、「評価重視」3.6、「愛他性」3.5であった。他の因子と異なり、「独立独歩」因子は得点の低い方に偏った分布をしていた(Figure 2)。多くの中学生が友人関係において孤高の態度をとらないことが示唆される。

5. 各因子の合計点の学校別、学年別、性別の分散分析

各因子の合計得点を従属変数、学校、学年、性を独立変数とした分散分析を行った。4 因子の検定を別々に行ったので、Bonferroni 補正により、 $0.05/4=0.0125$ を有意水準とした。その結果、第 1 因子「独立独歩」について学校、学年および性の主効果は有意ではなく、学校×性および学年×性の交互作用は有意でなかった。学校×学年および学校×学年×性の交互作用は算出されなかった。第 2 因子「社交上手」にて、性の主効果が有意であった ($P=0.002$) が、他は「独立独歩」因子と同じ結果であった。つまり男子の「社交上手」得点が女子に比べ高かった。第 3 因子「評価重視」は第 1 因子と同様の結果であった。第 4 因子「愛他性」では性の主効果が有意であり ($P<0.001$)、他の結果は「独立独歩」因子、「評価重視」因子と同様の結果だった。つまり女子の「愛他性」得点が男子に比べ高かった。以上より各因子の合計得点は、学校間、学年間に差はなく、有意な性差が「社交上手」因子 (男子>女子)、「愛他性」因子 (男子<女子) において認められた。

6. 妥当性の検討

本質問紙の 4 因子と榎本質問紙の 12 因子との相関係数を算出し、基準関連妥当性を検討した。有意水準を $P<0.001$ ($0.05/48$ 回 = 0.00104) と定め、それを満たす場合のうち、効果量が中以上 (Pearson の相関係数が 0.3 以上) の組み合わせを抽出した (Table 3)。両質問紙の各因子は互いに中程度以上の関連性を有していることが多かった。本質問紙の「独立独歩」因子は、榎本質問紙の「活動」、「感情」および「欲求」の各側面の全てにおいて、少なくとも 1 つの因子と中程度の関連性を有していた。「社交上手」因子は「活動」と「感情」の 2 つの側面のそれぞれ 1 つの因

子とだけ中程度の関連性を有していた。「評価重視」因子は「感情」側面の 2 つの因子と中程度以上の関連性を有していた。特に「不安・懸念」因子とは強い関連が見られた。さらに「欲求」側面の全ての因子と中程度の関連性を有していた。「愛他性」因子は「活動」、「感情」および「欲求」の各側面の全てにおいて、少なくとも 1 つの因子と中程度以上の関連性を有していた。特に「相互理解活動」因子とは強い関連が見られた。榎本質問紙の「独立」因子だけは、本質問紙の 4 因子全てとの関連性は低かった。なお、本質問紙の中で各因子間の相関を検討すると、互いに中程度以上の関連性を有している因子の組み合わせはなかった。

考察

本研究は、学校に適應できていない中学生の視点から作成された、われわれの知りうる限り初めての友人関係質問紙を用いて行われた。また設問が系統的に選択されたものではないという問題があるが、相談施設において日ごろ見聞される中学生の発話から選択された設問からなる質問紙を、普通学級の中学生に回答させたという特徴を有する。中学生の友人関係に関する研究で使用される質問紙をどのように作成するかについては、研究ごとにさまざまである。例えば、既存の質問紙を改変したもの (石本・久川・齊藤・上長・則定・日潟・森口, 2009; 笠原他, 2012)、高校生や大学生など他の年代向けに作成されたもの (吉岡, 2001; 笠原他, 2012; 高坂他, 2010a)、理論的背景から作成されたもの (柴橋, 2001; 高坂, 2010b; 黒田他, 2001) がある。一方、横塚は向社会的行動尺度の設問を数多くの中学生と高校生にアンケート調査を行った結果から作成している (横塚, 1989)。また小野らは中学生にインタビューを行って得られた回答から設問を作成した (小野他, 2002)。本研究の質問紙は、一見

健康な中学生ではなく、明らかに精神的不調を有する中学生の語った言葉を採取して作成されたが、このような方法で作成された質問紙は他に見いだせない。質問紙をどのように作成するか、特に質問文をどう設定するか、これらは難しい課題である（山崎・内田，2005）。しかし、本研究の質問紙の価値は、今後の信頼性や妥当性の検討、臨床群への使用による結果によって示されるであろう。

本質問紙の信頼性は「評価重視」因子の Cronbach's α がやや低く疑問が残るが、他の3因子の内的一貫性は保たれている。今後は再検査法により本質問紙の安定性を確認する必要がある。妥当性については、対人関係を評価する複本質問紙と部分的に関連を有しており、基準関連妥当性に問題はないであろうと推測される。今後は、相談施設や医療施設を訪れる中学生を対象とした検討、あるいは友人関係以外の観点からの測定法（例えば、不安や抑うつ質問紙）との関連性の検討などにより、内的妥当性や構成概念妥当性を考察していく必要がある。さらに、各設問あるいは各因子が精神疾患や発達障がいを持つ臨床群と健常群とを弁別できるかどうかという臨床的妥当性を検討することも必要である。なお、本質問紙の各因子はそれぞれ複本質問紙の3側面のうち少なくとも2側面と、各因子間において異なった関連性を有していた。本質問紙の4因子相互の相関が低いことを合わせると、本質問紙が複本質問紙とは異なる観点から中学生の友人関係を捉えていることを示唆している。

本質問紙から得られた4因子（独立独歩、社交上手、評価重視、愛他性）を設問内容から検討する。各因子の設問を見ると、「独立独歩」因子については、設問33を除き、友人との交流よりも一人自ら何かを行うという意思表示が示されている。友人がいないと訴えるのではなく、孤高を選んだと言える。この因子の得点の分布は前述のように偏って

いた。中学校生活に適應できていない当事者を対象とした検討が今後必要である。「社交上手」因子の設問は、同級生集団に躊躇なく、自然に溶け込めることを意味しており、他の因子と比べ最も分かりやすい内容である。

「評価重視」因子の設問は他の因子と異なり、内容が多様である。一つは周囲からの評価を重視する姿勢、他方は自らの内面を他者に伝えることへの困惑、さらに他者からの不快な発言の記憶という3つの異なる設問が含まれている（このことがやや低い内的一貫性に現れているのかもしれない）。これらが一つの因子にまとめられることの背景は、今後の妥当性の検討の中で明らかにされる可能性がある。「愛他性」因子は他者の助けになるであろう言動を対象者が日ごろを示していることであり、「社交上手」因子に次いで分かりやすい内容である。なお、重要なことと考えるが、これらの4因子間の相関関係が中程度以上に達しておらず、各因子が互いに独立している。この点に本質問紙の特徴がある。

次に、この4因子と他の研究から得られた因子との関係を検討する。奥野らは、他者から独立する、そして他者と協調するという観点から中学生を対象とした調査を行った（奥野他，2007）。得られた4因子のうち、友人関係についての因子は「自己重視傾向」、「他者重視傾向」、「評価懸念」の3つであり、本研究による「独立独歩」、「社交上手」、「評価重視」の各因子とそれぞれ類似している可能性がある。「自己重視傾向」因子に該当する設問は「考えやり方が友だちと違ってても気にならない」、「したいことがあると、周りから外れても、したいことをする」、「自分の考えを友だちが何と思っても気にしない」、そして「みんなと違ってても、自分が考えたとおりにやる」である。これらは本質問紙の「独立独歩」因子の各設問と似ており、中学生の同級生に対する構えの一側面を示している。しかし本質問紙の「独立独歩」得

点は低い方に偏って分布しているが、「自己重視傾向」の得点分布は記載されておらず、両因子の異同については不明である。「他者重視傾向」因子に該当する設問は「意見が分かれたときは友だちに合わせる」、「誰と一緒にかで、考えややり方が変わる」、「何かを決定するとき、自分で決めるよりも他の人たちに決めてもらいたいと思う」、「みんなと意見が分かれるのはいやだ」である。これは対人関係において受け身的であるかどうかの設問であり、本質問紙の「社交上手」因子とは異なる内容を含んでいる。「評価懸念」因子は「周囲の目が気になる」、「グループから離れると、どう思われるか気になる」という設問からなり、これは対人関係場面で怖じ気づいていることを意味している。本質問紙の「評価重視」因子は前述のように複数の内容から構成されており、内実は多様であることが予想されるが、少なくとも対人場面での怖じ気づきとは異なっている。また、小野らは、中学生の感情に関する調査を行い、信頼性の高い因子「相互理解」、「関係不安」を得た（小野他，2002）。「関係不安」は「評価重視」に類似するが、「意見が分かると、自分の意見を引っ込めてしまうことが多い」など、嫌われることをさけるために受け身的な態度をとるという内容であり、本質問紙の「評価重視」因子とは内実が異なると考える。さらに笠原らは友人に対する不安感情を調査し、「嫌われ不安」、「孤立不安」の2因子を得た（笠原他，2012）。これらの因子の設問は小野らの研究の「関係不安」因子の設問と類似しており、これも本質問紙の「評価重視」因子とは内実が異なると考える。これら以外の研究から得られた因子の中で、本研究における因子と類似の因子はなかった。以上より本質問紙は従来の質問紙とは異なる観点から中学生の友人関係を評価していると言える。

本研究の問題点を挙げる必要がある。第一

に、設問文の収集が、前述したように、いくぶん系統的でない。しかし例えば、一定の期間に、相談に訪れた全生徒が述べた対人関係に関する発言を全て収集し、一定の頻度以上に認められたものを設問とする方法は系統的であるが、実行が難しい。本質問表は、一人の相談担当職員（筆頭筆者）が、生徒と日ごろ接触してきた7年間に、打ち解けてきた生徒が発した言葉の中から、頻繁に聞かれる言葉を想起し、最終筆者との討論の中で取捨選択して収集された設問文より構成されており、ある程度に一貫した方法により設問が抽出されたと考える。第二に、対象となった中学校は任意に選ばれており、金沢市の全生徒を対象としていないので、結果の解釈には注意が必要である。

本研究を要約すると、学校に適応できていない中学生が日常の中で示す発話を元に友人関係に関する、19設問からなる質問紙を作成し、「独立独歩」、「社交上手」、「評価重視」、「愛他性」の4因子を得た。信頼性として内的一貫性は概ね保たれていた。また基準関連妥当性も満足できるものであることが示唆された。今後、本質問紙の安定性、内的妥当性、構成概念妥当性、臨床的妥当性を検討する必要がある。

謝辞

本研究にあたり、統計処理のご指導をいただいた長谷川千秋さんに心から感謝の意を表します。そして、質問紙の回答にご協力いただきました中学生の皆様にあたためて深く感謝いたします。

引用文献

石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平（2009）. 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究, 20, 125-133.

- 榎本淳子（2003）．青年期の友人関係の発達
的变化：友人関係における活動・感情・欲
求と適応 風間書房．
- 笠原華葉・島谷まき子（2012）．中学生の親
和欲求および対友人不安感情が友人との
つきあい方に及ぼす影響 昭和女子大学
生活心理研究所紀要，**14**，69-78．
- 笠原嘉（1977）青年期 中央公論社
Pp.197-205．
- 粕谷貴志（2013）．中学生の友人関係と学校
適応との関連 奈良教育大学紀要，**62**，
179-185．
- 川原誠司・山崎美香子（1996）．中学生にお
ける友人関係の特徴と意義 東京大学大
学院教育学研究科紀要，**36**，301-324．
- 高坂康雅・池田幸恭・葉山大地・佐藤有耕
（2010a）．中学生の友人関係における共有
している対象と心理的機能との関連 青
年心理学研究，**22**，1-16．
- 高坂康雅（2010b）．青年期の友人関係におけ
る被異質視不安と異質拒否傾向：青年期に
おける変化と友人関係満足度との関連
教育心理学研究，**58**，338-347．
- 厚生労働省（2015）．平成 26 年版「子ども・
若者白書」 厚生労働省 P.67．
- 黒田祐二・桜井茂男（2001）．中学生の友人
関係場面における目標志向性と抑うつと
の関係 教育心理学研究，**49**，129-136．
- 文部科学省（2014）．平成 25 年度「児童生徒
の問題行動等生徒指導上の諸問題に関す
る調査」 文部科学省 P.22，P.60．
- 村瀬孝雄（1996）．中学生の心とからだ 岩
波書店 Pp.85-113(a)，118-200(b)．
- 中島美紀・五十嵐哲也（2012）．中学生の相
互独立性・相互協調性と友人関係との関連
愛知教育大学研究報告（教育科学編），**61**，
67-74．
- 奥野誠一・小林正幸（2007）．中学生の心理
的ストレスと相互独立性・相互協調性との
関連 教育心理学研究，**55**，550-559．
- 落合良行・佐藤有耕（1996）．青年期におけ
る友達とのつきあい方の発達的变化 教
育心理学研究，**44**，55-65．
- 小野智希・戸田須恵子（2002）．中学生の友
人関係に関する研究：活動的側面と感情的
側面からの一考察 北海道教育大学紀要
（教育科学編），**53**，1-12．
- 大久保智生（2005）．青年の学校への適応感
とその規定要因：青年用適応感尺度の作成
と学校別の検討 教肯心理学研究，**53**，
307-319．
- 小塩真司（2011）．心理データ解析第9回(1)
および(2) 小塩研究室Homepage
（<http://www.f.waseda.jp/oshio.at/index.html>）
（2015年9月15日現在）．
- 柴橋祐子（2001）．青年期の友人関係におけ
る自己表明と他者の表明を望む気持ち
発達心理学研究，**12**，123-134．
- 田中沙依・下田芳幸（2013）．中学生におけ
る友人に対する感情に関する研究：自己開
示および本来感との相互影響生の検討
富山大学人間発達科学部紀要，**8**，35-45．
- 横塚怜子（1989）．向社会的行動尺度（中高
校生版）作成の試み 教育心理学研究，**37**，
158-162．
- 山崎勝之・内田香奈子（2005）．調査研究に
おける質問紙の作成過程と適用上の諸問
題 鳴門教育大学研究紀要（教育科学編），
20，1-10．
- 吉岡和子（2001）．友人関係の理想と現実の
ズレ及び自己受容から捉えた友人関係の
満足感青年心理学研究，**13**，13-30．

付録

今回作成した質問紙を下に掲げる。

いずれの設問においても、「とてもよく思う」、「よく思う」、「どちらかと言えば思う」、「どちらかと言えば思わない」、「あまり思わない」、「まったく思わない」のどれかを選択させ、順に6点から1点の点数が与えられる（設問17は逆転項目であり、点数は逆に付される）。また、設問3, 4, 5, 7, 15, 27, 33が「独立独歩」因子、設問6, 17, 29, 31が「社交上手」因子、設問2, 13, 16, 20, 21が「評価重視」因子、設問9, 10, 26が「愛他性」因子を構成する。また、（＊）を付した設問は検討の途中で削除された設問文である。本質問紙の今後の研究においては、今回削除された設問を残した当初の質問紙を使用し、臨床的有用性を検討することも必要であろう。なお、下記の括弧内の文章や記号は実際の質問紙には掲載されていない。

あなたの同性の親しい友だちとの付き合い方について質問します。

以下の事柄に関し、その親しい友だちとの関係について、あてはまる数字に○をつけてください。

【選択肢】

1. まったく^{おも}思わない
2. あまり^{おも}思わない
3. どちらか^いと^{おも}言えば思わない
4. どちらか^いと^{おも}言えば思う
5. よく^{おも}思う
6. とてもよく^{おも}思う

（実際は、一つ一つの設問ごとに、選択すべき1から6までの数字が併記されている）

1. 友だちと^{とも}一度^{いちど}、おしゃべりをすれば、親友^{しんゆう}になれると思う。（＊）
2. 友だちと何を話したらいいのかわからないので考^{かんが}えてから話^{はな}す。
3. 友だちをもたなくてもいいというルールがあれば、本当^{ほんとう}は友だちなんていら^{とも}ないと思^{おも}う。
4. 友だちとは、学^{がっこう}校にいる時間^{じかん}だけつきあいたい。
5. 友だちと電話^{でんわ}やメールするときは、最低限^{さいていげん}の必要^{ひつよう}なことのみに^{つた}え伝える。
6. 友だちには自分^{じぶん}から声^{こえ}をかけ、仲間^{なかま}に入^{はい}っていく方^{ほう}だと思^{おも}う。

7. 友だちといっしょに行動すると自分のやりたいことができないと思う。
8. 友だちと約束をしたときだけ遊びにいくべきだと思う。（＊）
9. 友だちから悩みを相談されることが多い方だと思う。
10. 友人が何かで悩んでいるときには、自分から話しかけ相談にのろうとする。
11. 個人的な問題が発生したときには、友だちに相談するよりも自分で解決すべきだと思う。
（＊）
12. 友だちの悪いところは、はっきりと伝えた方がよいと思う。（＊）
13. 友だちから嫌なことを言われたら、いつまでも忘れられない。
14. 家庭では、一人の時間を過ごすことが大好きである。（＊）
15. 学校でも、できるならば一人の時間を過ごしたいと思う。
16. 友だちと自分の気持ちについて話し合うことは難しい。
17. 初めて会った人と仲良くなるまでには時間がかかる方だと思う。
18. 自分の性格は友だちに比べて、かわっていると思うときがある。（＊）
19. 趣味や興味のあることが友だちと似ている。（＊）
20. 友だちが自分のことをどのように思っているかはとても重要である。
21. 知らない人が自分のことをどのように思っているかはとても重要である。
22. 友だちに自分の間違いを認めるのは簡単である。（＊）
23. 友だちに自分の欠点や失敗はなるべく言わない方がいいと思う。（＊）
24. 友だちに自分の成果やうまくいったことを言うのは簡単である。（＊）
25. 友だちと意見が違うときには、納得がいくまでお互いに話し合う。（＊）
26. 友だちや友だちの家族の心配ごとや悩みを相談されることがある。

27. 友だちとつき合うよりも、勉強をがんばりたい。
28. 友だちとお互いの家を訪問しあって、一緒に遊ぶことがある。（＊）
29. 新しい友だちを作るのは簡単である。
30. 自分ではいねいに話したつもりでも、話し方が失礼だと周囲の人から言われることがよくある。（＊）
31. 休み時間などで、いろいろな人の会話に入ることが簡単にできる。
32. 冗談がわからないことがよくある。（＊）
33. 自分の好きなことを話せる友だちがいない。

Table 1 The number of subjects to factor analyses

School		Seventh grader	Eighth grader	Nineth grader	Total	Total
A	Male	69	89	86	244	465
	Femal	70	87	64	221	
B	Male	N/A	69	N/A	69	144
	Femal	N/A	75	N/A	75	
C	Male	N/A	N/A	17	17	31
	Femal	N/A	N/A	14	14	
Total		139	320	181		640
					Male	330
					Female	310

N/A, not applicable

Table 2 Item roading of four-factor solution with promax rotation

	1	2	3	4
15. 学校でも、できるならば一人の時間を過ごしたいと思う	.697	-.088	-.119	.058
4. 友だちとは、学校にいる時間だけつきあいたい	.657	.088	.064	-.033
7. 友だちといっしょに行動すると自分のやりたいことができないと思う	.606	.133	.150	.038
27. 友だちとつき合うよりも、勉強をがんばりたい	.564	.074	.005	.085
3. 友だちをもたなくてもいいというルールがあれば、本当は友だちなんていらなと思う	.552	-.071	-.086	.030
33. 自分の好きなことを話せる友だちがいない	.498	-.069	.014	-.104
5. 友だちと電話やメールするときは、最低限の必要なことのみを伝える	.380	.009	.032	-.079
29. 新しい友だちを作るのは簡単である	.104	.899	.090	-.068
17. 初めて会った人と仲良くなるまでには時間がかかる方だと思う	-.035	-.671	.171	.017
31. 休み時間などで、いろいろな人の会話に入ることが簡単にできる	-.071	.664	-.048	.028
6. 友だちには自分から声をかけ、仲間に入っていく方だと思う	.005	.524	.023	.069
20. 友だちが自分のことをどのように思っているかはとても重要である	-.177	.004	.863	-.017
21. 知らない人が自分のことをどのように思っているかはとても重要である	.035	.117	.615	.003
13. 友だちから嫌なことを言われたら、いつまでも忘れられない	.086	-.157	.444	.142
16. 友だちと自分の気持ちについて話し合うことは難しい	.265	-.129	.384	-.042
2. 友だちと何を話したらいいのかわからないので考えてから話す	.145	-.124	.371	-.097
26. 友だちや友だちの家族の心配ごとや悩みを相談されることがある	.000	-.117	-.046	.833
9. 友だちから悩みを相談されることが多い方だと思う	.067	.066	-.046	.825
10. 友人が何かで悩んでいるときには、自分から話しかけ相談にのろうとする	-.101	.124	.228	.502
Factor correlation		-.384	.061	-.200
			-.138	.230
				.256

Table 3 Pearson product-moment correlation coefficient between factors from two questionnaires

今回作成 した質問 紙	榎本質問紙											
	友人との活動				友人に対する感情					友人への欲求		
	相互理 解活動	親密確 認行動	共有 活動	閉鎖的 活動	信頼・ 安定	不安・ 懸念	独立	ライバ ル意識	葛藤	相互尊 重欲求	親和 欲求	同調 欲求
独立独歩	-.183	-.333*	-.304*	-.298	-.470*	.260	-.138	.215	.481*	-.189	-.432*	.011
社交上手	.167	.234	.335*	.253	.338*	-.258	.282	.072	-.182	.111	.143	.036
評価重視	.145	.121	-.030	.033	.049	.666*	-.126	.318*	.371*	.315*	.321*	.410*
愛他性	.507*	.478*	.215	.467*	.405*	.181	.269	.177	-.064	.428*	.305*	.204

*, correlation coefficient over .300

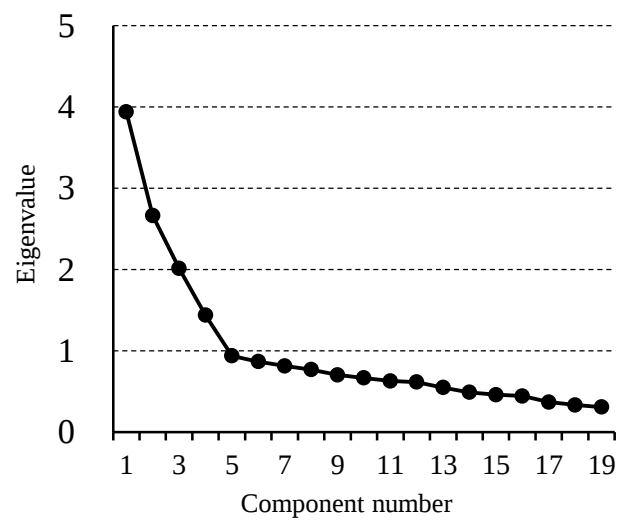


Figure 1 Scree plot for the last factor analysis

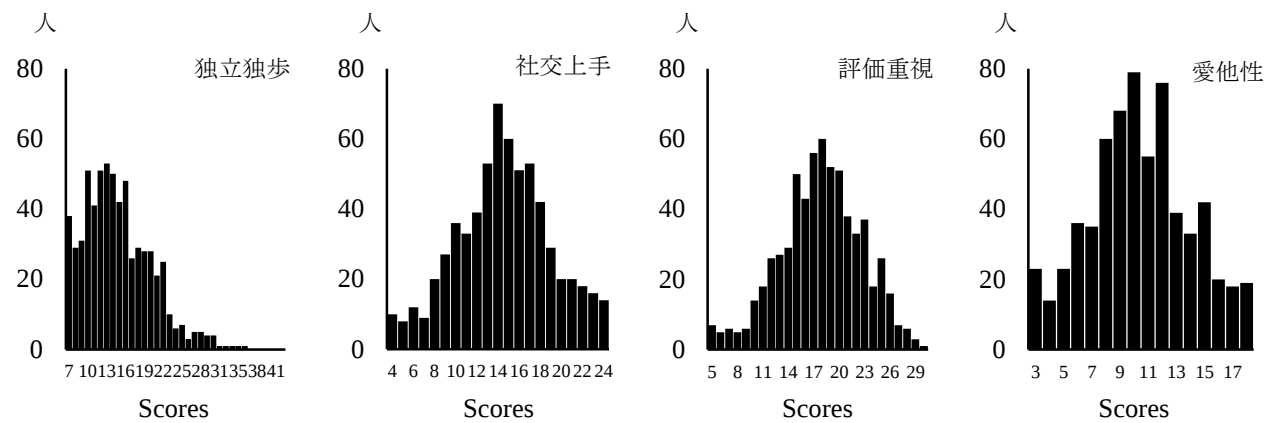


Figure 2 Histograms of four factors

中学生の精神的健康度に影響を及ぼす仲間友人関係の特徴

熊谷有紀子¹⁾, 棟居俊夫²⁾, 大井 学³⁾

- 1) 金沢市教育プラザ研修相談センター
- 2) 金沢大学子どものこころの発達研究センター
- 3) 金沢大学人間社会研究域学校教育系

Impact of peer relationships and friendships on junior-high school students' self-reported psychopathology

Yukiko Kumagai¹⁾, Toshio Munesue²⁾, Manabu Oi³⁾

- 1) Kanazawa Education Plaza Studies and Consultation Center
- 2) Research Center for Child Mental Development, Kanazawa University
- 3) College of Human and Teacher Education, Kanazawa University

抄録

中学生の友人関係と精神的健康度との関連性を調査する目的で、石川県金沢市内の中学 1～3 年生 640 名（男子 330 名）を対象に、仲間友人関係に関する 2 つの質問紙と精神的健康度を測定する Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) を施行した。仲間友人関係を評価する質問紙の一つは既存の質問紙（12 因子から構成）、他方は筆者らが不適応を示す中学生の発言内容から作成した質問紙（新規質問紙、6 因子を抽出）である。各因子の得点を独立変数、SDQ から得られる困難性総合得点を従属変数とした。重回帰分析により、精神的健康度に有意に関連する 2 つの因子が得られた。この因子は新規質問紙に属し、因子を構成する質問文の内容は他者関係における内省的な気構えを示していると考えられた。中学生の精神的健康の一部は、仲間友人関係において彼らが実際に示す行動や希望、他者関係における外に向かった気構えではなく、内省的な姿勢と関連する可能性が示唆された。

キーワード

中学生、仲間関係、友人関係、精神的健康度、内省

背景

身近にいる同世代の他者とのかかわり、つまり仲間関係 (peer relationship) の原型はヒトにおいて極めて早い時期に始まる。産院で生まれたばかりの赤ん坊は、傍にいる赤ん坊の泣き声の影響を受け、泣き始める (Somner, 1971)。乳

児期の後半から、他の仲間との偶然の出会いの時に、近づき、微笑みかけ、自分の玩具を見せるといった仲間関係が生じる (Eckerman ら, 1989)。特定の仲間たちを他の仲間たちよりも好む友人関係 (friendship) の原型が派生するのは、2 歳前後という早い時期である (Howes ら, 1992)。

幼児期の間に、仲間友人関係は相手との会話や口論、相手への協力や思いやり、ごっこ遊びにおける想像的なやりとりなどの多様な内実を持ち始め (Hay ら, 2004), かつ異性ではなく同性の仲間との関係が形づくられる (Hold-Cavell ら, 1986). 小学生時代において、友だちとなる者は、空間的および地理的に近くにいる者から、学年を経るにつれて、人柄を考慮して選ばれた者、あるいは自分に人柄が似ている者へと変化していく (明田, 1995). これは、小学生時代の遊び友だちから、中学生時代に出現する友人への変遷の前触れに相当する. さらに中学生時代の特徴は、第二性徴による身体の変化、物事の形式的で抽象的な考え方の萌芽に加えて、他者との関係の重点が養育者から友人へと変化することである (川原ら, 1996). 生後まもなくから始まった仲間友人関係は、中学生時代に至って、人間社会を形づくる対人交流の端緒になると言えるだろう.

ところで中学生時代は、精神病性障害、気分障害、種々の不安障害という主要な精神疾患が発症し始める青年期の初期にあたる. さらに不登校やいわゆる「いじめ」も多い. 不登校の中学生における出現率は 2.69% と高値であり、その誘因として友人関係をめぐる問題が 15.9% にのぼるとされている (文部科学省, 2014, b). いじめが認知された学校の割合は小学校や高等学校に比べて中学校が 65.5% と多い (文部科学省, 2014, a). いじめはゆがんだ形の仲間関係の最たるものの一つである. 従って、中学生の精神的健康度に関与する仲間友人関係についての研究は重要である.

中学生の仲間友人関係を主題とした研究は、欧米ではいじめや物質関連障害に焦点を当てたものが多いが (Modecki ら, 2014; Leung ら, 2014), 日本では仲間友人関係と中学生の心性との関連性に注目したものが多く、精神疾患や精神的不健康に関連する研究は少ない (黒田ら, 2001). 本研究は、比較的大きな中学生集団を対象に、彼らの精神的健康度と仲間友人関係の

関連性を、不適応生徒の視点から作成された質問紙をも使用して調査することを目的とする.

方法

1. 対象者と調査の手続き

本研究の対象と調査の手続きは既報 (熊谷ら, 2015) に記したので概略を示す. 石川県金沢市内の 3 つの中学校の通常学級に在籍する生徒 778 名を対象に質問表を配布した. 調査は「疫学研究における倫理指針」(文部科学省・厚生労働省, 平成 20 年 12 月 1 日一部改正) に基づいて行われ、研究計画は金沢大学医学倫理委員会の承認が得られている. 回収された質問紙のうち欠損値のある対象者を除き、640 名 (男子 330 名, 女子 310 名) が解析の対象となった. 学年別および性別の内訳は、1 年生 139 名 (69 名, 70 名), 2 年生 320 名 (158 名, 162 名), 3 年生 181 名 (103 名, 78 名) である.

2. 使用した質問紙

質問紙は、榎本が作成した質問紙 (榎本, 2003; 以下、榎本質問紙), 筆頭筆者が新たに作成した質問紙 (以下、新規質問紙), および「子どもの強さと困難さアンケート (Strengths and Difficulties Questionnaire, SDQ)」(ウェブサイトよりダウンロード. <http://www.sdqinfo.com/py/sdqinfo/b3.py?language=Japanese>) の 3 つである.

榎本質問紙は、中学生から大学生までの友人関係を、友人との活動、友人への感情、友人への欲求という 3 つの側面から評価する. それぞれ 4 因子 (「相互理解活動」, 「親密確認行動」, 「共有活動」, 「閉鎖的活動」), 5 因子 (「信頼・安定」, 「不安・懸念」, 「独立」, 「ライバル意識」, 「葛藤」), 3 因子 (「相互尊重欲求」, 「親和欲求」, 「同調欲求」) により構成される. 種々の研究において使用され (笠原ら, 2012; 中島ら, 2012; 田中ら, 2013), 友人関係を捉える代表的な質問紙として本研究で採用した. 各因子の得点を検討の対象とした.

新規質問紙について、作成の経緯、信頼性および妥当性の一部の検討を既報に記した（熊谷ら，2015）が、概略を述べる。市教育委員会の某相談施設に7年間在籍した筆頭筆者が、日ごろの相談活動の中で中学生が仲間や友人との関係について発する談話の中から、頻度の高い談話を想起して列挙した。彼らは何らかの不適応を起こして相談施設を利用しているが、医療機関にて診断を受けている者もいれば、そこまで至らない者もある。年間の実利用者数は約200人である。列挙された談話を文章化し、第三筆者と共同で取捨選択を繰り返し、最終的に33の質問文を作り上げた（表1参照）。回答は「まったく思わない」、「あまり思わない」、「どちらかと言えば思わない」、「どちらかと言えば思う」、「よく思う」、「とてもよく思う」の6つから一つを選択させ、それぞれに1点から6点までの得点を付した。因子分析により、「独立独歩」、「社交上手」、「評価重視」、および「愛他性」の4因子を抽出した。各因子の得点を検討の対象とした。ただ4因子を構成する質問は全33問のうち19問と6割弱であった。残りの14質問だけを対象とした因子分析を行い、抽出できる因子があれば、その得点も検討の対象とした。

SDQは、子どもや青年の精神的な適応状態を簡便に評価するために開発され（Goodman, 1997）、全25設問という短い質問紙にもかかわらず、精神疾患のスクリーニングに優れ（Goodmanら, 2000）、世界各国にて使用され（<http://www.sdqinfo.com/>）、日本語版の信頼性と妥当性が確認されている（野田ら, 2013）。SDQは問題行動、多動・不注意、情緒不安定、友人関係問題、向社会性の5因子構造に分けられ、それぞれが下位尺度とされている。向社会性を除いた4尺度の合計得点を「困難性総合得点」と呼び、高値であるほど不適応の程度が大きいことを示唆する。この得点を評価の対象とした。

3. 統計解析

まず2つの質問紙の各因子の得点（ α を0.003に設定）、および困難性総合得点（ $\alpha = 0.05$ ）を従属変数、学年と性を独立変数とした二要因分散分析を行った。次に両質問紙の各因子の得点と困難性総合得点の間の相関係数を求めた（ $\alpha = 0.003$ ）。最後に困難性総合得点を従属変数とし、2つの質問紙の各因子の得点を独立変数とした単回帰分析を行った（ $\alpha = 0.05$ ）。そこで有意な回帰式が得られた因子の得点を独立変数とし、ステップワイズ法により変数を選択する重回帰分析を行った（ $\alpha = 0.05$ ）。また困難性総合得点には「友人関係問題尺度」の得点が含まれている。そこで前者から後者を減じた得点を従属変数として、前述と同様に、単回帰分析および重回帰分析を行った。

結果

1. 新規質問紙の因子分析

既報（熊谷ら, 2015）で寄与しなかった14質問について、既報と同様の方法で因子分析を行い、「対話重視」、「戸惑い」の2因子を得ることができた（表1）。Cronbach's α の値はそれぞれ0.543, 0.447であった。

2. 2つの質問紙の各因子の分散分析

いずれの因子においても学年の主効果は見られなかった。性の主効果が9因子において認められ（表2, 3）、榎本質問紙の「相互理解活動」、「親密確認行動」、「閉鎖的活動」、「信頼・安定」、「不安・懸念」、「相互尊重欲求」、「親和欲求」の7因子、新規質問紙の因子「愛他性」において女子の得点が有意に高かった。新規質問紙の因子「独立独歩」では男子の得点が有意に高かった。因子「閉鎖的活動」では交互作用が認められ、男子において学年の単純主効果が有意であり、1年生と2年生に比べ、3年生の得点が有意に高かった。因子「相互尊重欲求」でも交互作用が認められ、男女両方において学年の単純主効果が有意であり、男子では1年生

と2年生に比べ3年生の得点が有意に高く、女子では3年生に比べ2年生の得点が有意に高かった。

3. 困難性総合得点の記述統計数値および分散分析

困難性総合得点の範囲は2～33, 最頻値は11, 中央値も11, 平均および標準偏差は 11.8 ± 4.9 であった。二要因分散分析では学年および性の有意な主効果, 有意な交互作用は認められなかった。

4. 2つの質問紙の各因子と困難性総合得点の相関

困難性総合得点と「不安・懸念」, 「評価重視」, 「戸惑い」の3因子の得点との間に有意な相関を認めた。ただ効果量は $0.134 \sim 0.157$ と高くはなかった(表4)。

5. 単回帰分析および重回帰分析

単回帰分析により有意であった「不安・懸念」, 「葛藤」, 「社交上手」, 「評価重視」, 「愛他性」, 「戸惑い」の各因子の得点, そして各因子の分散分析において有意な主効果の認められた性を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果, 「評価重視」(標準化係数が 0.127 , t 値が 3.091 , $P = 0.002$) および「戸惑い」(それぞれ 0.096 , 2.33 , 0.02)の2因子が説明力のある変数として選択された。調整済決定係数は 0.030 であり, 回帰式の当てはまりは低かった。

困難性総合得点から友人関係問題尺度得点を減じた得点を従属変数とした単回帰分析を行ったところ, 「相互理解活動」, 「共有活動」, 「閉鎖的活動」, 「不安・懸念」, 「葛藤」, 「親和欲求」, 「社交上手」, 「評価重視」, 「愛他性」, 「戸惑い」の10因子において有意な回帰式が得られた。この10因子と性を独立変数とした重回帰分析を同様に試みた。その結果は有意であり, 説明力のある因子として「評価重視」(標準化係数が 0.139 , t 値が 3.425 , $P = 0.001$), 「閉鎖的

活動」(それぞれ 0.147 , 3.791 , < 0.001), 「戸惑い」(0.087 , 2.128 , 0.034)の3つが選択された。

考察

本研究により、中学生の精神的健康は仲間友人関係のある側面に影響を受けている可能性が示唆されるが、その関連性の内容を考察する。

まず、本研究における榎本質問紙の各因子の得点の平均値, そして分散分析において性の有意な主効果を認めた因子は、既存の研究(榎本ら, 2003)の結果とほぼ同じであった。多くの因子において男女差が見られたが、友人関係の態様の性差はよく知られている(Bukowski ら, 1996)。SDQの困難性総合得点の得点分布の形, 得点の範囲や中央値も, 5000名を超える小学4年生から中学3年生を対象に行った研究(野田ら, 2013)の結果とほぼ同じであった。これらのことは、本研究の対象者の特性が既存の研究における対象者の特性と大きく異なることはなかったことを示唆している。

今回使用した2つの仲間友人関係質問紙について検討する。榎本質問紙の質問文は、友人関係の重要要素を活動, 感情, 欲求と定め, この3要素について青年に自由記述をさせた語句に基づいて作成されている(榎本, 2003)。従って質問文の内容の多くは実際の行動あるいは希望を記述した文章である(例えば「交換日記をする」, 「友だちを信頼している」, 「友だちと一緒にいたい」)。一方, 新規質問紙の文章を閲覧すると, その内容は仲間友人関係について回答者がとる気構えと見なしうる(例えば「友だちとは, 学校にいる時間だけつきあいたい」)。これは両質問紙に認められる大きな相違点である。

中学生の精神的健康度には2回の重回帰分析の両者で選択された「評価重視」および「戸惑い」と名付けられた因子(いずれも新規質問紙に属する)が関連していることが示唆された。この2因子を構成する質問文(表1)を検討することは意味があるだろう。因子「評価重視」

は内容が互いにやや異なった質問から構成されている。つまり友人との会話の難しさ（質問番号 2, 16）、友人から受けた不快な体験の記憶の想起（質問番号 13）、そして仲間友人を含めた周囲の他者が自分について抱く可能性のある評価の重視（質問番号 20, 21）である。また因子「戸惑い」の質問文は周囲の多くの仲間たちと異なる自分を見いだしていることを意味する。これらを要約すると、中学生の精神的健康度は仲間や友人を含む他者との関係に対する内省的な気構えと関連していると考えられる。一方、新規質問紙における、孤高を好むかどうか（因子「独立独歩」）、人付き合いが好きか否か（因子「社交上手」）、相談しやすい雰囲気有しているかどうか（因子「愛他性」）、話し合いを重んずるか否か（因子「対話重視」）についての 4 因子は、また榎本質問紙の全因子は、精神的健康度との関連性を有していなかった。新規質問紙におけるこの 4 因子の質問文を概観すると、多くは内省的な内容ではなく、外に向かった気構えと考えられる（例えば「友だちとつき合うよりも、勉強をがんばりたい」）。榎本質問紙の内容は前述のように現実にとった行動や抱いている希望である。中学生における精神的健康は、本人が自らをどのように感じ、考えているのかという姿勢、つまり内省と関与するのかもしれない。ただ内省と精神的健康の関連性についてはなお結論が得られていない（Hoyer ら, 2000）。本研究の結論も控えめに取り扱うべきである。

本研究の問題点を挙げる。第一に、対象者は金沢市という石川県の県庁所在地から任意に選ばれた中学校に所属しており、地域の中学生全体を代表しているとは限らない。結果の解釈には慎重さが必要である。第二に、新規質問紙の質問文は系統的に集められたものではない。質問紙の質問文の設定は難しい課題である（山崎ら, 2005）。しかし、相談施設に所属する筆頭筆者が現実の中学生が発する談話から採取した質問文という価値があると考えられる。

本研究により中学生の精神的健康度には、彼らの仲間友人関係が部分的に関与している可能性が示唆された。その仲間友人関係は他者に対する内省的な姿勢という特徴を有しており、その特徴は不適応に陥っている中学生の発話に基づいた質問文への回答により得られた。

文献

- 明田芳久（1995）：児童の仲間関係形成について：仲間選択の理由、仲間関係の文化度、および共感性との関係。上智大学心理学年報 19: 29-42.
- Bukowski WM, Newcomb AF, et al (1996): The Company They Keep: friendship in childhood and adolescence. pp. 168-172, Cambridge University Press, Cambridge.
- Eckerman CO, Davis CC, et al (1989): Toddlers' emerging ways of achieving social coordinations with a peer. Child Development 60: 440-453.
- 榎本淳子（2003）：青年期の友人関係の発達的变化：友人関係における活動・感情・欲求と適応。風間書房、東京。
- Goodman R (1997): The Strengths and Difficulties Questionnaire: a research note. Journal of Child Psychology and Psychiatry, and Allied Disciplines 38: 581-586.
- Goodman R, Ford T, et al (2000): Using the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) to screen for child psychiatric disorders in a community sample. British Journal of Psychiatry 177: 534-539.
- Hay DF, Payne A, et al (2004): Peer relations in childhood. Journal of Child Psychology and Psychiatry, and Allied Disciplines 45: 84-108.
- Hold-Cavell BC, Attili G, et al (1986): A cross-cultural comparison of children's behaviour during their first year in a preschool. International Journal of Behavioural Development 9: 471-483.

- Howes C, Phillipsen L (1992): Gender and friendship: relationships within peer groups of young children. *Social Development* 1: 230-242.
- Hoyer J, Klein A (2000): Self-reflection and well-being: is there a healthy amount of introspection? *Psychological Report* 86: 135-141.
- 笠原華葉, 島谷まき子 (2012): 中学生の親和欲求および対友人不安障害が友人とのつきあい方に及ぼす影響. *昭和女子大学生活心理研究所紀要* 14: 69-78.
- 川原誠司, 山崎美香子 (1996): 中学生における友人関係の特徴と意義. *東京大学大学院教育学研究科紀要* 36: 301-324.
- 熊谷有紀子, 棟居俊夫, 大井学 (2015): 中学校生活に不適應を示す生徒の発言内容から作られた友人関係質問紙の検討. *心理学の諸領域 (受理)*.
- 黒田祐二, 桜井茂男 (2001): 中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係. *教育心理学研究* 49: 129-136.
- Leung RK, Toumbourou JW, et al (2014): The effect of peer influence and selection processes on adolescent alcohol use: a systematic review of longitudinal studies. *Health Psychology Review* 8: 426-457.
- Modecki KL, Minchin J, et al (2014): Bullying prevalence across contexts: a meta-analysis measuring cyber and traditional bullying. *Journal of Adolescent Health* 55: 602-611.
- 文部科学省 (2014): 平成 25 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」. (a) 22 頁, (b) 60 頁, 文部科学省, 東京.
- 中島美紀, 五十嵐哲也 (2012): 中学生の相互独立性・相互協調性と友人関係との関連. *愛知教育大学研究報告 (教育科学編)* 61: 67-74.
- 野田航, 伊藤大幸, 他 (2013): 日本語版 *Strengths and Difficulties Questionnaire* 自己評価フォームの信頼性・妥当性の検討: 単一市内全校調査を用いて. *臨床精神医学* 42: 119-127.
- Somner ML (1971): Newborn's response to the cry of another infant. *Developmental Psychology* 5: 136-150.
- 田中沙依, 下田芳幸 (2013): 中学生における友人に対する感情に関する研究: 自己開示および本来感との相互影響性の検討. *富山大学人間発達科学部紀要* 8: 35-45.
- 山崎勝之, 内田香奈子 (2005): 調査研究における質問紙の作成過程と適用上の諸問題. *鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編)* 20: 1-10.

表1 新規質問紙における因子を構成する質問文

因子「独立独歩」
3. 友だちをもたなくてもいいというルールがあれば、本当は友だちなんていらないと思う。
4. 友だちとは、学校にいる時間だけつきあいたい。
5. 友だちと電話やメールするときは、最低限の必要なことのみを伝える。
7. 友だちといっしょに行動すると自分のやりたいことができないと思う。
15. 学校でも、できるならば一人の時間を過ごしたいと思う。
27. 友だちとつき合うよりも、勉強をがんばりたい。
33. 自分の好きなことを話せる友だちがいない。
因子「社交上手」
6. 友だちには自分から声をかけ、仲間に入っていく方だと思う。
17. 初めて会った人と仲良くなるまでには時間がかかる方だと思う。（*）
29. 新しい友だちを作るのは簡単である。
31. 休み時間などで、いろいろな人の会話に入ることが簡単にできる。
因子「評価重視」
2. 友だちと何を話したらいいのかわからないので考えてから話す。
13. 友だちから嫌なことを言われたら、いつまでも忘れられない。
16. 友だちと自分の気持ちについて話し合うことは難しい。
20. 友だちが自分のことをどのように思っているかはとても重要である。
21. 知らない人が自分のことをどのように思っているかはとても重要である。
因子「愛他性」
9. 友だちから悩みを相談されることが多い方だと思う。
10. 友人が何かで悩んでいるときには、自分から話しかけ相談にのろうとする。
26. 友だちや友だちの家族の心配ごとや悩みを相談されることがある。
因子「対話重視」
12. 友だちの悪いところは、はっきりと伝えた方がよいと思う。
22. 友だちに自分の間違いを認めるのは簡単である。
24. 友だちに自分の成果やうまくいったことを言うのは簡単である。
25. 友だちと意見が違うときには、納得がいくまでお互いに話し合う。
因子「戸惑い」
18. 自分の性格は友だちに比べて、かわっていると思うときがある。
32. 冗談がわからないことがよくある。
因子に関与しない質問
1. 友だちと一度、おしゃべりをすれば、親友になれると思う。
8. 友だちと約束をしたときだけ遊びにいくべきだと思う
11. 個人的な問題が発生したときには、友だちに相談するよりも自分で解決すべきだと思う。
14. 家庭では、一人の時間を過ごすことが大好きである。
19. 趣味や興味のあることが友だちと似ている。
23. 友だちに自分の欠点や失敗はなるべく言わない方がいいと思う。
28. 友だちとお互いの家を訪問しあって、一緒に遊ぶことがある。
30. 自分ではいいに話したつもりでも、話し方が失礼だと周囲の人から言われることがよくある。

*、得点を逆転させて付する質問。

表 2 複本質問紙の各因子における得点と分散分析

因子名	1 年生	2 年生	3 年生	分散分析の結果
相互理解活動				
男子	24.5 [8.6]	24.4 [7.2]	28.9 [7.9]	性の主効果が有意 ($F(1, 634) = 18.11, P < 0.001$).
女子	28.1 [7.6]	29.1 [7.2]	28.8 [7.5]	
親密確認活動				
男子	26.1 [6.8]	27.8 [6.0]	29.5 [7.1]	性の主効果が有意 ($F(1, 634) = 140.547, P < 0.001$).
女子	34.8 [7.9]	35.0 [7.2]	34.2 [7.1]	
共有活動				
男子	30.1 [7.3]	31.2 [7.3]	31.2 [8.3]	
女子	29.4 [9.9]	31.0 [7.6]	27.2 [8.2]	
閉鎖的活動				
男子	8.7 [3.3]	9.6 [3.9]	11.5 [4.3]	性の主効果が有意 ($F(1, 634) = 97.43, P < 0.001$). 男子にて学年の単純主効果が有意 ($F(2, 634) = 3.46, P = 0.032$).
女子	13.5 [4.8]	13.9 [5.1]	13.2 [4.1]	
信頼・安定				
男子	33.7 [5.6]	33.2 [6.3]	33.2 [7.3]	性の主効果が有意 ($F(1, 634) = 10.782, P = 0.001$).
女子	35.4 [6.3]	35.9 [6.3]	34.1 [5.5]	
不安・懸念				
男子	19.0 [7.2]	19.3 [6.7]	18.0 [6.9]	性の主効果が有意 ($F(1, 634) = 24.097, P < 0.001$).
女子	22.4 [8.5]	22.4 [7.7]	20.6 [7.2]	
独立				
男子	11.7 [3.3]	12.1 [3.2]	12.8 [3.1]	
女子	12.1 [2.8]	12.6 [2.8]	11.8 [2.7]	
ライバル意識				
男子	10.0 [3.7]	9.9 [3.1]	10.5 [3.5]	
女子	10.5 [3.9]	10.2 [3.6]	9.8 [3.6]	
葛藤				
男子	10.6 [3.9]	10.0 [3.8]	9.6 [3.7]	
女子	9.8 [4.0]	9.4 [3.7]	9.0 [3.5]	
相互尊重欲求				
男子	22.4 [4.8]	22.7 [5.7]	24.6 [7.0]	性の主効果が有意 ($F(1, 634) = 24.906, P < 0.001$). 学年の単純主効果が有意 (男, $F(2, 634) = 4.643, P = 0.01$; 女, $F(2, 634) = 5.032, P = 0.007$).
女子	25.5 [5.1]	26.9 [5.0]	24.5 [5.7]	
親和欲求				
男子	22.0 [5.1]	22.3 [5.2]	22.1 [5.9]	性の主効果が有意 ($F(1, 634) = 30.118, P < 0.001$).
女子	25.4 [4.9]	25.1 [4.8]	23.0 [4.2]	
同調欲求				
男子	12.9 [3.4]	12.7 [3.9]	12.3 [4.7]	
女子	13.1 [3.7]	12.9 [3.9]	12.2 [4.1]	

数値は平均 [標準偏差].

表 3 新規質問紙の各因子における得点と分散分析

因子名	1 年生	2 年生	3 年生	分散分析の結果
独立独歩				
男子	16.4 [5.7]	15.2 [5.8]	15.5 [5.8]	性の主効果が有意 ($F(1, 634) = 13.902$, $P < .001$).
女子	14.0 [5.5]	14.2 [4.8]	13.9 [4.1]	
社交上手				
男子	14.8 [4.5]	15.1 [4.4]	15.3 [4.5]	
女子	14.4 [4.6]	13.9 [4.4]	14.0 [4.6]	
評価重視				
男子	17.1 [4.3]	17.7 [4.4]	16.8 [5.4]	
女子	18.5 [5.2]	19.1 [4.7]	17.2 [4.8]	
愛他性				
男子	9.0 [3.5]	8.8 [3.4]	9.1 [3.5]	性の主効果が有意 ($F(1, 634) = 115.769$, $P < .001$).
女子	12.5 [3.2]	12.3 [3.0]	11.0 [2.9]	
対話重視				
男子	14.4 [3.5]	14.7 [3.4]	15.1 [3.6]	
女子	14.5 [3.1]	14.9 [2.9]	13.5 [2.6]	
戸惑い				
男子	6.9 [2.0]	6.6 [2.3]	6.3 [2.4]	
女子	7.1 [2.5]	7.1 [2.1]	6.2 [2.3]	

数値は平均 [標準偏差].

表 4 2つの質問紙の各因子の得点と SDQ の困難性総合得点との相関係数

榎本質問紙	困難性総合得点との	新規質問紙	困難性総合得点との
因子名	相関係数	因子名	相関係数
相互理解活動	.051	独立独歩	.009
親密確認活動	.017	社交上手	-.095
共有活動	.062	評価重視	.157
閉鎖的活動	.076	愛他性	.100
信頼・安定	-.017	対話重視	-.008
不安・懸念	.134	戸惑い	.136
独立	-.066		
ライバル意識	.024		
葛藤	.110		
相互尊重欲求	.025		
親和欲求	.040		
同調欲求	.045		

太字は $P < 0.003$.